

岡先生の思い出

加藤素明

西洋古典の専攻でもない私が、岡道男先生のウェルギリウス『アエネイス』研究講義を受講しようと思ひ立ち、いまとなっては懐かしい文学部旧館の二階にあった岡研究室の扉を叩いたのは、1989年秋のことでした。

美学を専攻しつつ古典古代を自らの研究対象として選んだという理由で、原典を読む訓練を積み、また古典古代の世界というものを知りたいたと、そのころの私は哲・史・文を問わず古代関係の授業に出没しておりました。それにしても、古典語経験も貧弱なくせに、いきなり岡先生の研究講義に現れるというのは、若気のなさしむる業というべきか。いや、あるいは、大学院進学準備をしている頃でしたので、勉強を始める機会はいましかないという一心だったかのもしれません。

初回の授業の前に所属や受講の動機などを岡先生にお話しすると、先生は「ラテン語はできますか？」とお尋ねになっただけで、あとはにこやかに「では、どうぞ」と、言葉少なではありましたが、この妙な新参者を暖かく迎え入れて下さいました。

その年、岡先生の授業は後期からの開講でした。それまでの私のラテン語経験といえば、トマス・アクィナス『神学大全』などの中世哲学のものや、バウムガルテン『美学』(1750)といった近世以降のものをかじった程度でありました。はじめて読む「古典」ラテン文学が『アエネイス』だったというのは、幸なのか不幸なのか。不幸なはずはありませんが、なにしろ、それまでやってきた勉強とはまったく違う世界の話が展開されるわけですから、基本的なことをまだ何も知りません。授業中の私は、ときおりポカンとした表情を浮かべておったやもしれません。ともあれ、毎回の授業の始めに、並み居る諸先輩方が見事に訳読していかれる様子を茫然と見送るのが、私の通例でありました。しかし、岡先生はそういう私を慮ってなのでしょうか、講義の中で基本的な用語が出てくると必ずこれを平明な言葉に言い換えて、説明を加えて下さるのでした。

12月の集中講義期間中に行われた授業の最終回でのことでした。岡先生が終

わり際に「では次回は加藤くんやってみますか？」とおっしゃいました。年明けの講義で訳読をせよとのこと。身に余る光栄に、嬉しさと感謝の気持ちで胸がいっぱいになりつつ、その一方で身が引き締まる思いもしていたことを、いまでもはっきりと憶えております。

翌1990年のアリストテレス『詩学』、さらにその翌1991年のホラティウス『詩論』の研究講義では、数々の問題点や諸家の解釈を明晰に分析され、その上で御自身の解釈を講述されました。いま、当時の講義録を読み返し、また後に岩波文庫から出版された翻訳・訳注・解説を読むたびに、講義中、先生が随所で解釈上の注意を促された、その言葉とそのときの先生のお姿が思い起こされます。そして、教えていただいた数多くの事柄が、いま教壇上で講義を行う立場になった私の中で生きているのを、今更ながら驚嘆の念をもって実感している今日この頃です。

岡先生は退官された後も、著書を御恵贈下さったり、お年賀の御挨拶に書き添えた近況に対して励ましの e-mail を下さったりと、何かにつけてお氣にかけて下さいました。また拙い論文をお送りすると、いくらか日を経たぬうちに、その要旨を的確にまとめ、今後の励ましを葉書に書いてお送り下さるその心遣いに、いまでも厚く感謝いたしております。

1999年、東京大学での西洋古典学会の折り、懇親会の席で御挨拶申し上げました。その秋から私は、短期研修でスコットランドの The University of St Andrews を訪れ、古典学教室の Stephen Halliwell 教授の下で学ぶことになっておりましたが、岡先生はそれをととても喜んで下さり、かの地のこと、大学のことなどをお話し下さいました。いまにして想えば、これが岡先生とお話しする最後の機会でありました。

岡先生からは、古典学を通じて、さまざまなものを学んだように思います。先生は古典文学の領域だけでなく、哲学や史学やその他の分野にも造詣が深くていらっしゃいましたが、そのようなことは表面に出そうとされませんでした。しかし、先生から自ずとにじみ出てくる豊かさ、それは古典語読解や解釈というものに留まらない、岡先生という人が持つ人間の大きさでもあり、またその大きな人間の中に息づく学問の大きさでもあります。そういった、全人格的なものを岡先生から感じ取ることができた幸福を糧に、これからもささやかながら進んでいきたいと思っております。